



Title	ボードレールの「異邦人」とカミュの『異邦人』 : タイトルの日本語訳をめぐって
Author(s)	北村, 卓
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 37-46
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88391">https://doi.org/10.18910/88391</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ボードレールの「異邦人」とカミュの『異邦人』 ——タイトルの日本語訳をめぐって——<sup>1</sup>

北村 卓

## はじめに

韻文詩集『悪の華』*Les Fleurs du mal* (初版 1857、第二版 1861) の詩人として一般には知られるシャルル・ボードレール Charles Baudelaire (1821-67) であるが、晩年には新たなジャンルとして「散文詩」の開拓を試み、その制作に精力を注いだ。ボードレールの散文詩の発端は 1855 年に遡るが、習作的段階を脱し、独自の制作理念と方法論を獲得するのは、1862 年『ラ・プレス』*La Presse* 紙のために準備された 26 篇の作品群においてである。このとき『小散文詩』*Petits Poèmes en prose* の総題を冠して 20 篇が掲載 (6 篇は未掲載) されるが、序文ともいえる編集長「アルセーヌ・ウーセ宛の手紙」*À Arsène Houssaye* のあと、散文詩群の冒頭に置かれたのが *L'Étranger* である。

この特権的な位置は、ボードレールの死後、1869 年に刊行されたミシェル・レヴィ版『シャルル・ボードレール全集』*Œuvres complètes de Charles Baudelaire de Michel Lévy frères* の『第 4 巻』に詩集として収録された『小散文詩』*Petits Poèmes en Prose (Le Spleen de Paris* 『パリの憂鬱』／『パリの憂愁』とも呼ばれる) においても変わらない。現代のわれわれが目にするボードレール散文詩集のいずれのバージョンでも、その冒頭の作品は *L'Étranger* なのである。

一方、アルベール・カミュ Albert Camus (1913-1960) は、ボードレールの散文詩 *L'Étranger* から 80 年後の 1942 (昭和 17) 年、同題の小説 *L'Étranger* を出版する。タイトルについてカミュに直接話を聞いたロジェ・キヨ Roger Quilliot は、カミュが「もしボードレールから借りたとしても、それは無意識になされたものだ」と答えた旨を証言している<sup>2</sup>。しかし、だからといってキヨ自身も付言しているように、その言葉を文字通り信じる必要はないだろう。カミュの脳裏にあの有名なボードレールの作品がなかったとは想像し難い。

<sup>1</sup> 本稿は、2021 年度日本比較文学会関西大会 (2021 年 11 月 13 日、於関西学院大学) のシンポジウム「パンデミックの時代における恐怖、孤独、そして連帯 — デフォー、ボードレール、カミュ」における発表の一部を元としている。同じくパネリストとして参加された仙葉豊氏と三野博司氏からは多大な示唆をいただいた。とりわけ三野氏からは、シンポジウムの準備段階から、本稿のテーマをめぐってもさまざまなお教示を頂戴した。この場をお借りして厚く御礼申し上げる。

<sup>2</sup> Albert Camus, *Théâtres Récits Nouvelles*, préface par Jean Grenier et annotés par Roger Quilliot « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1962, p.1916.

さて、ボードレールの *L'Étranger* もカミュの *L'Étranger* も、現在の日本ではタイトルの日本語訳としていずれも「異邦人」が一般に流布している。しかしながら、この2つの作品がなぜ「異邦人」と訳されたのかという点については、これまで議論の俎上に載ることはなかった。本稿の目的は、現在あたかも自明のように見なされているこの「異邦人」という日本語訳タイトルがどのような経緯をへて選ばれ、定着するに至ったのかを検討することにある。

### ボードレール *L'Étranger* の日本語訳タイトルの変遷

ボードレールの散文詩 *L'Étranger* を日本で最初に紹介したのは上田敏である。敏が 1897 (明治 30) 年 5 月、『江湖文学』に掲載した「幽趣微韻」と題する文章には以下のように書かれている。

ポオル、ヱルレエヌ (一八四四 — 一八九六) が掲言して「われらは色彩を望まず、たゞ陰影を捉へむと欲す」(*L'Art Poétique*) といひ、又曠世の鬼才を奮て、幽聳奇抜の新聲を翹めたるボドレエル (一八二一 — 一八六七) が、其散文詩中に、「詩人の望む所は親子眷属の愛にあらず、又権勢利達にもあらず、美は其欲する所なれど、未だ最上の目的にあらず、まして黄金をや。彼が日夜輾轉反側して熱望する所のものは幽婉縹緲、捉ふべからざるかの陰影なり」といへるは共に近代詩人の思想を代表せるものにして、其神経の多感なるを證し、自然人生の美に於て、幽婉微妙なる細緻の趣を掬まむとする熱意を示せるものなり<sup>3</sup>。(下線強調は筆者)

この論考で敏は、自身が高く評価する象徴派詩人ヴェルレーヌの先達としてボードレールを位置づけている。下線で示した箇所は散文詩 *L'Étranger* の内容を簡略にまとめたものであるが、そこにはこの散文詩を芸術至上主義および象徴主義の流れの中で捉えようとする意図がはっきりと窺える。ここにはタイトルの日本語訳は記されていないが、この敏の紹介によって、日本では当初、ボードレールの散文詩もまた象徴主義の文脈の中で理解されていくことになる。

さて、こののち 1908 (明治 41) 年、川路柳虹訳の「奇人」を嚆矢として、次々と *L'Étranger* の翻訳が試みられることになる。「異邦人」が定着するまで (阿部良雄訳の『ボードレール全集 第 4 巻』(1987)の刊行までを目安とした) の邦訳タイトルの変遷をたどると次の通りになる。なお、このリストを作成するにあたり、『ボードレール 明治・大正期翻訳作品集』(川戸道明・榊原貴教編、大空社・ナダ出版センター、2016) の記述を参考にさせていただいた。またここに挙げたのは、作品自体も翻訳されている場合のみであり、評論や紹介等でタイトルだけに言及したものは省いている。

<sup>3</sup> 『定本上田敏全集 第 3 巻』(教育出版センター、1985、p.81)

刊行年	月	タイトル	翻訳者	掲載媒体
1908 (明治 41)	12	奇人	川路柳虹	『文庫』
1909 (明治 42)	4	解らぬ男	訳者不記	『読売新聞』
1909 (明治 42)	6	見知らぬ人	訳者不記	『新潮』
1910 (明治 43)	1	客	高浜長江	『東亜の光』
1911 (明治 44)	8	他國人	八橋有春	『詩歌』
1915 (大正 4)	9	異りもの	川路柳虹	『詩歌』
1916 (大正 5)	11	變り者	山村慕鳥	『感情』
1919 (大正 8)	10	見知らぬ人	馬場睦夫	『悪の華 (詩集)・附散文詩』 洛陽堂
1920 (大正 9)	1	不思議な人	谷崎潤一郎	「ボードオレエル散文詩集」(『解放』)
1922 (大正 11)	10	とつ國びと	川路柳虹	『歩む人 (詩集)』 大鑑閣
1926 (大正 15)	10	異國人	三富朽葉	『三富朽葉詩集』 第一書房
1928 (昭和 3)	6	他國者	大木篤夫	『近代仏蘭西詩集』 アルス
1928 (昭和 3)	11	不思議な男	高橋広江	『巴里の憂鬱』 井萩町・青郊社
1929 (昭和 4)	3	異國人	三好達治	「巴里の憂鬱」(『詩と詩論』)
1930 (昭和 5)	9	異國人	三好達治	『巴里の憂鬱』 改造社
1936 (昭和 11)	4	他國者	村上菊一郎	『巴里の悵鬱』 春陽堂
1939 (昭和 14)	8	異人さん	三好達治	『巴里の憂鬱』(『ボードレール全集 2』 河出書房)
1941 (昭和 16)	2	エトランジェ	村上菊一郎	『散文詩』 青磁社
1950 (昭和 25)	11	異國人	佐藤朔	『世界の詩人』 梧桐書院
1951 (昭和 26)	3	異人さん	三好達治	『巴里の憂鬱』 新潮文庫
1952 (昭和 27)	10	異人さん	三好達治	『學生版世界文学全集 悪の華・巴里の憂鬱・ラ・ファンファルロ・幼魔術師』 河出書房
1955 (昭和 30)	10	エトランジェ	中島昭和	『パリーの憂鬱』(大学書林語学文庫)
1957 (昭和 32)	10	異邦人	福永武彦	『パリーの憂愁』 岩波文庫
1959 (昭和 34)	7	異邦人	福永武彦	『パリーの憂愁』(『世界名詩集大成 3 フランス編 2』 平凡社)
1959 (昭和 34)	7	異邦人	秋山晴夫	『パリーの憂鬱』(『世界文学大系 33 ポオ・ボードレール』 筑摩書房)
1963 (昭和 38)	5	異邦人	福永武彦	『パリーの憂愁』(『ボードレール全集 1』 人文書院)
1964 (昭和 39)	12	異国の人	竹田靖治	『少年少女世界の名作文学 22 フランス編 4』(小学館)
1967 (昭和 42)	8	エトランジェ	村上菊一郎	『世界の詩集 2 ボードレール詩集』 角川書店
1967 (昭和 42)	10	異邦人	福永武彦	『ボードレール詩集』(『ポケット版世界の詩人 4』 河出書房)

1967 (昭和 42)	11	よそ者	齋藤磯雄	『ボオドレエル散文詩集』三笠書房
1968 (昭和 43)	6	異邦人	鈴木信太郎 阿部良雄	『パリの憂鬱』(『世界文学全集 26 ポオ・ボオドレール』筑摩書房)
1968 (昭和 43)	10	異邦人	栗津則雄	『パリの憂鬱』(『ボードレール詩集』講談社)
1970 (昭和 45)	5	異邦人	菅野昭正	『パリの憂鬱』(『新集 世界の文学 8 ネルヴァル・ボードレール』中央公論社)
1975 (昭和 50)	9	異邦人	秋山晴夫	『パリの憂鬱』(『近代世界文学 14 ポオ・ボオドレール』筑摩書房)
1979 (昭和 54)	10	異邦人	齋藤磯雄	『巴里の憂鬱』(『ボオドレエル全詩集』東京創元社)
1987 (昭和 62)	6	異邦人	阿部良雄	『パリの憂鬱』(『ボードレール全集 4』筑摩書房)

この一覧を見れば明らかなように、明治から大正期をへて戦後しばらくまで、この散文詩には多様な日本語のタイトルが付されていた。これを「異邦人」と最初に訳したのは福永武彦であり、1957 (昭和 37) 年、岩波文庫の福永訳『パリの憂鬱』に収められて広く知られることになる。そしてその後に *L'Étranger* を訳した諸家の多くは「異邦人」のタイトルを踏襲し、かくしてこの邦訳タイトルが定着していくのである。

### カミュ *L'Étranger* の日本語訳タイトル『異邦人』

日本でカミュの小説 *L'Étranger* の翻訳が初めて公刊されたのは、1951 (昭和 26) 年、『新潮』6 月特大号においてである。翻訳は石川淳の推薦を受けた窪田啓作が行い、このとき「異邦人」のタイトルが付けられた。この小説は大きな反響を呼び<sup>4</sup>、1952 年には、宮崎嶺雄訳の『ペスト』とともに新潮社『世界文学全集』の『異邦人・ペスト』の巻に収められてベストセラーとなる<sup>5</sup>。さらに窪田訳の『異邦人』は 1954 年に新潮文庫からも出版され、以後版を重ねて今日に至る。

*L'Étranger* を日本で最初に「異邦人」と題して訳したのは窪田啓作であることは間違いないとしても、窪田はなぜ「異邦人」と訳したのだろうか。この問いを考えるにあたって、窪田以前にこの作品が紹介された際、どのような日本語訳タイトルを与えられていたのかについてまず考えてみたい。

『異邦人』に先駆けて 1950 (昭和 25) 年 5 月に『ペスト』 *La Peste* を翻訳、刊行した宮崎嶺雄は、巻末の解説「カミュについて」の中で、*L'Étranger* にも触れ、『異國人』としている。また解説の最後の箇所では、宮崎が参考にした文献が記されているが、そのうち

<sup>4</sup>『異邦人』を批判した広津和郎とそれに反駁した中村光夫との間で、いわゆる『異邦人』論争が繰り広げられ、世間の注目を集めた。

<sup>5</sup>『毎日新聞』(夕刊、1952 年 12 月 11 日) では、「今週のベストセラーズ」の中に、1 位として本書が紹介されている。

*L'Étranger* への言及が見られるのは、「フランス文化友の會」編の「現代フランス作家叢書」第3巻「アルベール・カミュ」(新樹社、1949年5月)と河盛好藏の『フランス歳時記』(大日本雄辯會講談社、1948年7月)である<sup>6</sup>。前者には、窪田啓作の友人でもあった白井浩司が「異國人」について」という一文を寄せているのに対し、後者では『異邦人』として *L'Étranger* が紹介されている。『フランス歳時記』では、第3部「フランス学芸通信」の第3章に「キリストのないパスカル」と題してカミュが取り上げられており、その章末には1946年11月13日の日付がある<sup>7</sup>。戦後最も早い時期のカミュの紹介であるが、当時はフランスの情報に直接触れるのは困難であり、河盛はアメリカの雑誌などから情報を得たとしている。また「アルフレッド・カミュ」とするなどの間違いもある。

では河盛はなぜ『異邦人』としたのか。「キリストのないパスカル」という章題<sup>8</sup>からも、河盛はそこに何らかの宗教的、聖書的なイメージを付与しようとしたのではあるまいか。この姿勢は窪田にも引き継がれているように思われる。窪田は1954(昭和29)年9月刊行の新潮文庫版の「解説」において、こう書いている。

母の死の翌日、海水浴にゆき、女と関係を結び、フェルナンデルの映畫を見て笑いころげ、やくざな友人の女でいりの關り合いになつて、「太陽のせい」でアラビア人を殺害し、處刑の日が近づくにも拘らず、自分が「幸福であつたし、今もなお幸福である」と確信し、處刑の日に大勢の見物人が集り、憎惡の叫びをあげて自分を迎えて呉れる——そのことだけを希うムルソーは、現代のムイシュキン公爵であるかも知れぬ。神なきカミュに関して、その福音書的側面を強調することは誤解を招き易いが、敢て云うならば、ムルソーはパリサイびとの社會のいけにえの仔羊であり、ドストエフスキーの作品に登場するあの虚しく謙抑な主人公たちの朋がらに違いない<sup>9</sup>。(下線強調は筆者)

そもそも「異邦人」という語は、日本において、神に選ばれたユダヤ人以外の民族、つまり異教徒を指す語(ヘブライ語の *gôyîm*、ギリシャ語の *Ethnē, Ellēnes*、ラテン語の *Gentiles* 等<sup>10</sup>)の訳語として『聖書』などでしばしば用いられてきた。たとえば、『広辞苑(第7版)』でも、「異邦人」は「①外国人。異國人。」の次に「[宗]」(宗教的な専門用語)として「②

<sup>6</sup> カミュ『ペスト(上下)』(宮崎嶺雄訳、創元社、1950、下巻 p.191)

<sup>7</sup> 河盛好藏『フランス歳時記』(大日本雄辯會講談社、1948、pp.217-223)

<sup>8</sup> この章題に関して、河盛は、アメリカの雑誌から得た情報だと述べているが、その情報の元となった一つは、サルトルが1943に書いた『『異邦人』解説』« *Explication de l'Étranger* »だと考えられる。そこでサルトルは『異邦人』の作者カミュとパスカルとの親近性を指摘している。

<sup>9</sup> カミュ『異邦人』(窪田啓作訳、新潮文庫、1954、p.133)。なお、この箇所における小説のストーリーの要約は、註8で示したサルトルの論考におけるものとほとんど同じである。またサルトルはそこでドストエフスキー『白痴』の主人公ムイシュキン公爵にも言及している。窪田がこの解説を書くにあたってサルトルを参照したのは明らかであろう。さらに窪田自身が、サルトルのこの文章を『『異邦人』解説』と題してのちに翻訳している(『シチュアション I』(『サルトル全集 第11巻』人文書院、1965)。

<sup>10</sup> 『キリスト教大辞典』(教文館、1978、p.88)

ユダヤ教徒が神の選民であるという自覚から異教徒を区別して呼んだ言葉。」と定義されている<sup>11</sup>。さて、先の引用箇所では窪田は、律法を厳格に遵守することを求めそれに従わない者を斥けたパリサイ派が支配する社会を現代の社会になぞらえ、そしてパリサイ人の偽善を糾弾して迫害を受けたイエスの像をムルソーに重ね合わせている<sup>12</sup>。このような作品の解釈に立った上で、窪田は「異国人」ではなく「異邦人」のタイトルをあえて選択したのだと考えられる。

## 福永武彦 (1918-79) と窪田啓作 (1920-2011)

窪田啓作 (本名窪田開造)<sup>13</sup> は、早稲田大学に在職したフランス文学者窪田般彌の兄でもあるが、1943 (昭和 18) 年に東京帝国大学の法学部を卒業し、横浜正金銀行 (のちの東京銀行) に入行、上海で終戦を迎える。戦後はヨーロッパで勤務をし、欧州東京銀行の頭取にまで登りつめ、パリにて没している。在学中から詩や小説を書き、フランス文学の翻訳にも精力的に取り組んだ。この窪田は東大在学中、1942 年の秋、福永武彦、中村真一郎、加藤周一、白井健三郎らとともに文学グループ「マチネ・ポエティック」を結成した人物でもある。

いっぽう福永武彦は、1941 (昭和 16) 年に東京帝国大学の仏文科を卒業。当初日伊協会に務め、その後参謀本部で暗号解読に従事する。また渡辺一夫の下で仏文学事典の編纂にも加わるが、1944 年 2 月、日本放送協会国際局亜州部 (のちの海外局欧州部) に勤務する。そのときの同僚に白井浩司がいた。白井浩司も「マチネ」の仲間であり、福永や窪田の身近にいた存在である<sup>14</sup>。その年の 10 月、福永は山下澄子 (原條あき子) と結婚 (1950 年 12 月に協議離婚)。しかし 1945 年 2 月に急性肋膜炎を発症。4 月には澄子の身内を頼って北海道帯広市に疎開し、7 月に長男の夏樹 (池澤夏樹) を得る。終戦後は帯広で英語の教員を務めたりもするが、肺結核を患い、1947 年 10 月、東京清瀬村の国立東京療養所に入所し、1953 年 3 月まで 5 年半もの療養生活をここで送ることになる。この間、幾度か生命の危機にさらされるが、福永は創作や翻訳の活動を止めることはなかった。なかでも特筆すべきは、1951 年 4 月、ジュリアン・グリーン『幻を追ふ人』*Le Visionnaire* を窪田啓作との共訳で創元社より刊行しているという事実である。窪田が書いたと思われるその「あとがき」には、次のように記されている。

<sup>11</sup> 『広辞苑 (第 7 版)』(岩波書店、2018、p.205)

<sup>12</sup> 三野博司氏によれば、ムルソーをキリストと結びつける見方は、カミュ自身が「アメリカ大学版への序文」(1955)で示しているが、1952 年 1 月 15 日付「朝日新聞」に掲載された小島亮一特派員による「カミュ会見記」の中にすでに見いだされる(三野博司『カミュ『異邦人』を読む (増補改訂版)』彩流社、2011)。「あとがき」を書くにあたり、窪田がこの記事を参考にしたことは間違いないだろう。

<sup>13</sup> 窪田啓作および窪田の『異邦人』訳については、井上健「翻訳家窪田啓作の戦中と戦後—定型詩実験、散文創作から『異邦人』翻訳へ」(上智大学文化交渉学研究、2019) に詳しい。

<sup>14</sup> 清瀬で療養中の 1949 年 1 月 6 日(木)の日記には、「白井浩司より来書、カミュの「エトランジェ」に対する感動を表してある。読みたい」(『福永武彦新生日記』新潮社、2012、p.17) とある。この時点ですでに福永はカミュの *L'Étranger* の存在を知り、関心を寄せていることに注目したい。

終戦直後、福永はいちはやくこの翻譯に手を染め、その前半部の譯稿を作ったが、偶々病を得て中絶し、永く原稿は彼の病床に秘められることとなった。このたび正式の翻譯権取得と同時に、その後半部（譯書一五三頁以下）を窪田が譯了し、ここに一卷として上梓する<sup>15</sup>。

その後、1954(昭和29)年9月、福永はこの作品の後半部を自分の手で訳し直し、『幻を追う人』として新潮文庫より刊行する。以下はその「あとがき」の最後の箇所である。

このたび新潮文庫に収めるに際し、僕は窪田の了解を得て、全篇を訳し改めた。従ってこの後半部は、前に窪田の訳したものと較べて、別種の文体の如く見えるかもしれない。窪田の訳業はそれ自体見事なもので、今僕がこれを改めたことの可否はにわかには分からない。ただ全篇を同じ文体で統一するという意味と、原著者を偏愛するという意味とで、僕の我儘をゆるしてくれるように窪田に望みたい。また、この改稿に当って一年以上の時日を費やしたことを、新潮社にお詫びしたい<sup>16</sup>。

ここからも、当時、福永と窪田の間にはかなり親密な関係があったことが推察される。さて1951(昭和26)年、窪田・福永共訳の『幻を追ふ人』が出た2か月後、窪田啓作によるカミュ『異邦人』の翻譯が『新潮』6月特大号に掲載される。そして、3年後の1954年9月、グリーン『幻を追う人』(福永武彦単独訳)とカミュの『異邦人』(窪田啓作訳)が新潮文庫から同時に刊行され、さらにその3年後の1957年10月には、ボードレール『パリの憂愁』(福永武彦訳)が岩波文庫より出版されることになる。本書の改訳版(1966年1月)に付された「解説的ノート」には、1957年に書かれた文章に続けて、次のようなくだりがある。

以上の文章は昭和三十二年九月に書かれた。そして付け足しとして、この『パリの憂愁』の翻譯が、前半は昭和二十七年に、後半は昭和二十九年になされたと報告した。今から考えても、当時僕がこの仕事に全力を挙げたことは間違いない。ただ、前半、というよりも殆ど全部に近い分量を僕が翻譯していたのは、僕が清瀬村の療養所に病を養っていた頃であり、手許に格別の参考書も辞書もなく、体力同様に僕の語学力もまた甚だ低下していた。後半を訳した頃も、漸く地獄から甦った程度で、訳文が粗雑であることに変わりはない<sup>17</sup>。

この記述によれば、福永が *L'Étranger* を含む前半部を訳したのは1952(昭和27)年とい

<sup>15</sup> ジュリアン・グリーン『幻を追ふ人』(福永武彦・窪田啓作譯、創元社、1951、p.269)

<sup>16</sup> 『ジュリアン・グリーン全集 第9巻』(人文書院、1981、p.240)

<sup>17</sup> ボードレール『パリの憂愁 (改訳版)』(福永武彦訳、岩波文庫、1966、pp.195-6)

うことになる。もちろん、その前からこの作品には親しんでいたはずであるが、遅くとも1952年には「異邦人」のタイトルとともに訳了していたと考えられる。さらに、ボードレーの *L'Étranger* が散文詩篇の冒頭の作品であることを考えれば、それを福永が「異邦人」として訳したのは、1952年の前半、つまり窪田がカミュの小説を『異邦人』として翻訳した1951年6月から1年もたたない時期だったと推測できる<sup>18</sup>。

さて1951(昭和26)年の4月に窪田と共訳で刊行したジュリアン・グリーン『幻を追ふ人』の原稿料をめぐり、福永は4月19日の日記にこう記している。

\*せっかく創元社から金のはひつたが、洋服屋へ三、〇〇〇円(これは方岡さんから借りる予定)本屋へ支払予定一、五〇〇円で残金はいくらもない。その上、岩松貞子から一四、〇〇〇円借りている。方岡さんからの借は全部で一五、〇〇〇円になる筈、窪田の一〇、〇〇〇円。考へると憂鬱<sup>19</sup>。(下線部強調は筆者)

このように、福永が窪田に1万円もの借金をしていたことから<sup>20</sup>、文学上の交流に留まらず、私生活においても親しく交際していた様子が窺い知れる<sup>21</sup>。以下に、両者の関係とそれぞれの翻訳に関連する事項を中心に、福永が清瀬の療養所に入所してから、『パリの憂愁』の翻訳を刊行するまでの10年間を略年表で示しておく。

- |       |     |  |
|-------|-----|--|
| 1947年 | 10月 | 福永、東京清瀬村の国立東京療養所に入所。   |
| 1948年 | 7月  | 河盛好藏『フランス歳時記』で <i>L'Étranger</i> を「異邦人」と紹介。  |
| 1949年 | 1月  | 6日 福永、白井浩司よりの手紙でカミュ「エトランジェ」の感想を読み、強い興味を覚える。  |
| 1951年 | 4月  | 福永と窪田、ジュリアン・グリーン『幻を追ふ人』 <i>Le Visionnaire</i> を共訳で創元社より刊行。前半を福永、後半を窪田が担当。この頃、福永は窪田に1万円の借金。 |
| 1951年 | 6月  | 窪田、『新潮』6月特大号に、カミュ『異邦人』の翻訳を掲載。  |
| 1952年 | 1月  | 15日『朝日新聞』に小島亮一特派員の「カミュ会見記」が掲載。<br>この年、福永はボードレー『パリの憂愁』の前半を翻訳。                               |
| 1953年 | 3月  | 福永、清瀬の医療所を退所。  |
|       | 4月  | 福永、学習院大学文学部講師となる。  |

<sup>18</sup> 1951年12月31日の日記には、「\*かうして歳月が過ぎて行く。この一年にしたことは僅かしかない。「風土」の完成。短編が一つ、散文詩が二篇、やりかけでサボったままのボードレーの訳。(…)」とある。(『福永武彦新生日記』(新潮社、2012、p.97))

<sup>19</sup> 同前、p.143。当時窪田は、日本橋の東京銀行本店に勤務し、安定した収入を得ていた。

<sup>20</sup> この1万円は、1952年7月に刊行された『風土』の原稿料で、9月1日に返済される(同前 p.190)。

<sup>21</sup> 池澤夏樹の「序」が付された2つの日記、『福永武彦戦後日記』(2011)と『福永武彦新生日記』(2012)には、2人の交遊を示す記述が散見される。

1954年 9月 福永、グリーン『幻を追う人』の単独訳を新潮文庫より刊行。

9月 窪田、カミュ『異邦人』の翻訳を新潮文庫より刊行。

この年、福永はボードレール『パリの憂愁』の後半を翻訳。

1957年 10月 福永、ボードレール『パリの憂愁』の全訳を岩波文庫より刊行。

最後に、ボードレールの「異邦人」とカミュの『異邦人』の間の類縁性に触れておきたい。ボードレールの散文詩 *L'Étranger* は、見知らぬ男とその男に通俗的な質問を投げかける人物との対話で構成されている。対話者から「世にも変わった異邦人」*« extraordinaire étranger »*<sup>22</sup>と見なされるこの存在もまた、窪田がいう「パリサイびとの社会のいけにえの仔羊」として、さらにボードレールの文脈に置き換えるなら、浅薄な進歩主義や博愛主義が蔓延する社会の中で孤立せざるをえない「詩人／芸術家」として捉えることもできる。そうした点を鑑みるならば、窪田と福永がその交流の中で2つの *L'Étranger* の間に潜む主題的連関に気づいた可能性もおおいにある。時系列的に言えば、原作の場合とは逆に、日本語での翻訳ではまずカミュの『異邦人』があり、続いてボードレールの「異邦人」が成立したことになる。河盛好藏の『フランス歳時記』から着想を得た可能性もあるが、窪田が選んだ『異邦人』というタイトルは福永にも大きな刺激を与えたに相違ない。だからといって、ボードレールの散文詩「異邦人」のタイトル訳語に関して、窪田から福永への一方通行的な影響があったとは考え難い。むしろ福永と窪田の相互作用の中で形成されたものとみなすべきではないだろうか。

## おわりに

これまでの考察を通して、福永武彦によるボードレールの散文詩「異邦人」の翻訳と窪田啓作によるカミュの小説『異邦人』の翻訳が、2人の密接な交流関係を背景として、非常に近い時期になされていることが明らかになった。さらに、両翻訳タイトルの直接的な関係を示す資料はいまのところ見いだされなくても、2つの作品に通底するテーマを福永と窪田両者が共有し、「異邦人」というタイトルをそれぞれの作品に与えたのではないかという仮説は、さまざまな傍証からも、きわめて有力であると考えられる<sup>23</sup>。

なお、今回の作業を通して、ボードレールの「異邦人」とカミュの『異邦人』はタイトルのみならず、作品の本質においても密接に連関しているのではないかという課題が浮上した。これについては、別稿において改めて論じたい。

---

<sup>22</sup> Baudelaire, *Œuvres complètes I*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1975, p.277.

<sup>23</sup> 「異邦人」というタイトルに着想を与えた可能性があるものとして、ほかに1950(昭和25)年2月、『新小説』に掲載された辻亮一(1914-2013)の小説「異邦人」も挙げられるかもしれない。辻はこの作品で、同年8月に第23回芥川賞を受賞。同小説は12月に文藝春秋新社より単行本『異邦人』として刊行された。辻は早稲田大学仏文科の出身であるが、その小説は、戦後旧満州で抑留された辻自身の経験をもとにしており、あくまで中国人社会の中における外国人・異国人としての自分が描かれている。そこにフランス文学や宗教性はもちろん、カミュの『異邦人』に繋がる側面は認められない。

## 主要参考文献

- Baudelaire, *Œuvres complètes I*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois,  
« Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1975.
- Albert Camus, *Théâtres Récits Nouvelles*, préface par Jean Grenier, textes établis et annotés par  
Roger Quilliot, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1962.
- Albert Camus, *Œuvres complètes II*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.
- Jean-Paul Sartre, « Explication de *l'Étranger* » in *Situation I*, Gallimard, 1947.
- カミュ『異邦人』(窪田啓作訳、新潮文庫、1954)
- カミュ『ペスト (上下)』(宮崎嶺雄訳、創元社、1950)
- ジュリアン・グリーン『幻を追ふ人』(福永武彦・窪田啓作譯、創元社、1951)
- 『ジュリアン・グリーン全集 第9巻』(人文書院、1981)
- サルトル『シチュアシオン I』(『サルトル全集 第11巻』人文書院、1965)
- 『ボードレール全集 (全4巻)』、福永武彦編集 (人文書院、1963-64)
- 『ボードレール全集 (全6巻)』、阿部良雄訳・註 (筑摩書房、1983-93)
- ボードレール『パリの憂愁 (改訳版)』(福永武彦訳、岩波文庫、1966)
- 『定本上田敏全集 第3巻』(教育出版センター、1985)
- 『福永武彦全集 第20巻』(新潮社、1988)
- 福永武彦『福永武彦戦後日記』(新潮社、2011)
- 福永武彦『福永武彦新生日記』(新潮社、2012)
- 井上健「翻訳家窪田啓作の戦中と戦後—定型詩実験、散文創作から『異邦人』翻訳へ」(『上智大学文化交渉学研究』、2019)
- 川戸道明・榊原貴教 編『ボードレール 明治・大正期翻訳作品集』(大空社・ナダ出版センター、2016)
- 河盛好藏『フランス歳時記』(大日本雄辯會講談社、1948)
- 辻亮一『異邦人』(『芥川賞全集 第4巻』文藝春秋、1982)
- 三野博司『カミュ『異邦人』を読む (増補改訂版)』(彩流社、2011)
- 三野博司『カミュを読む—評伝と全作品』(彩流社、2016)
- 『キリスト教大辞典』(教文館、1978)
- 『広辞苑 (第7版)』(岩波書店、2018)
- 『毎日新聞』(夕刊、1952年12月11日)